通して私が得たものは、又先生方が私達に与え得るものが、知識だけではなかった事を感謝しています。

＜万葉集における憶良の位置＞

――憶良の歌人的性格とその特異性――

第二回卒業　野尻　真理子
（旧姓　定形）

学園を卒業してから、二年と七ヶ月が過ぎ、すでに一児の母として、0歳の娘を中心としたリズムで毎日を送ってきた。そこに突然、「卒業論文の思い出」という原稿を依頼され、何か、遠い昔のことのように、なつかしく学生時代がよみ返ってくる。

「卒業論文」。それは私にとって、四年間の大学生活での、最後の情熱を結集したもののように思える。できあがったものは、本当に未熟なものではあるが、何回かの壁に直面しながらも、自分のこの筆で文章を作りあげていくという大変な作業ができ得たのも、たくさんの自由な時間が与えられている大学生活であったからではないだろうか。

そういう意味で、とかく惰性で過してしまいがちな学生生活を、この卒論によって、緊張感と充実感が味わえたような気がする。

ゼミは万葉集で、卒論のテーマは「山上憶良」であった。

三年と四年の二回のゼミ旅行で、大和のあぜ道をてくてくと歩きながら、私は思わずにはいられなかった。こんなにのどかな、しかも壮大な大和を舞台に、美しい数々の歌を詠んだ人達は、いったいどのような人格であったのだろうかと。

そして、中でも特に、人間的な暖かさ、人間くささが感じられた、山上憶良という人を、彼の作品から、私なりに想像してみたのである。

「山上憶良」という人物を書いた、立派な書物が多くある中で、如何に私の憶良を描き出そうかと、ずいぶん苦しんだ。しかし、結果的には、新しい憶良像を描き出すには、余りにも勉強が足りなかったし、時間も十分ではなかったのだが……。

四千五百首の膨大な歌の中でも、学生時代には、そのほんの一部をかじったに過ぎない。何十年か後、自由な時間がもてる時がきたら、再びなつかしい大和を散策し、万葉の歌をひもときたい。これが、私の夢でもある。そうできたら、今度は私の人生にも、緊張感と充実感を与えてくれるかもしれない。

＜『源氏物語』における紙と書＞

第二回卒業　中沢　尚

卒業してから三年、在学中は伊藤先生のゼミナールで楽しく学園生活をおくらせていただきました。先生に「私は卒論を書くためのみに大学に入ったのではありません」と申しあげたりして、本当は力無くして書けなのいをカバーしたものの、四苦八苦。出来あがり一〇八枚、題名は「源氏物語における紙と書」という論文であった。先生は「昔より縁起の良い枚数だ」と一〇八枚の枚数をまず誉めて下さり、質疑応答では「すっきりした論文で」とおっしゃったのを思い返せば、やはり私の浅い勉強を見抜かれていたのでしょう。

源氏物語の中には、いろいろな紙の種類、その紙の出所、つくり

方まで描写した個所が非常にたくさんみられ、紙特有の用途までも決まっていた事が明らかであった。紙の質と色によって使い方がちがうこと、例えば、写経につかう紫紙、常に身につけていて、歌を書く畳紙、国内のものから外来の唐紙まで、種々さまざまの料紙が場面と人柄とに適して登場してくることは、源氏物語の優美さの一端をになうものであり、その時代の文化的な感覚と生活のにじみでる一つの資料となりえるものであった。料紙に文字を書く描写も大変多くみられ（その個所を抜き出してカードにしたら厚さ10センチ程もあったから、どのくらいだったのだろう）　どのような文字でどのような崩し方をして、墨つぎ・墨つきはどのようであったという書き方に対する描写は料紙同様に興味深い分析をすることができた。仮名の種類、崩し方の別、墨つぎと墨つきの別、これは、版本によって「墨つぎ」とかかれたり「墨つき」とかかれたりした個所もあって、筆に墨をつけ直す意か、墨の濃淡かは疑問であった所もあったように思う。「源氏物語における紙と書」とは文化的実証的卒論であり、今考えれば、人間と書との関係、紙との関係等もっと深く追求すべきであったろう。ただ、私の趣味が、つたない書道であったから、このように料紙と書との調和に美を感じることをもとにした平面的実証におわってしまったのである。未熟な論文ではありましたが、私にとっては、今でも続きを勉強してみたいと思わせる卒論でありました。今日は、この原稿を書かせていただきながら、久方ぶりに、国語国文への静かな懐しさを思いおこしております。

後になりましたが、今度、国文学科報をだされること、わたくし本当にうれしく、後々まですばらしい学報になりますよう祈っております。

△『十六夜日記』▽ ――地名の調査をめぐって――

第二回卒業　小池　雪子

今、大学生活を振り返り、果して私はどのような勉強をしたのかと考えますと、真先に、卒論のことを思い浮かべます。

三年、四年と伊藤先生のゼミに入り、春休みが終る頃、やっと〝日記文学〟それも女性の手になったものをと決め、阿仏尼の「十六夜日記」に挑戦することに決めました。しかし、それをどうように展開するか、また頭を悩ませてしまったのです。そこで、伊藤先生に、いい知恵を授けて頂くべく研究室に伺いました。その頃、私はハイキング同好会に籍をおいてあちこちを歩き回ることに興味を抱いておりました。先生は、そのことをご存じだったようで「あなたはハイキング同好会にいて、歩くことが好きなようだし、また慣れているから、阿仏尼の歩いたところを自分の足で確め阿仏尼の頃と現在とを比較してみてはどうだろう」ととってもすばらしいアイデアを出して下さいました。そして、「文学遺跡辞典」なるもので調べると、場所等も非常にわかりやすく出ていることも教えて頂き、早速辞典を片手に、日記の中に出てくる、地名を抜き出し、調べることから始めました。また、「十六夜日記」の中に出てくる場所に関し、だいたい同じ頃に書かれた「海道記」「東関紀行」等とも比較してみることにしました。一通り、京都から鎌倉までのチェックをし、他の参考書で調べたエピソード等も折り混ぜて実地検証の前の資料が整いました。ちょうど夏休みの始まる七月頃のことでした。